George Orwellの二つの視点について

特に*Down and Out in Paris and London*を中心に

宮　崎　郁　司

1

George Orwell (1903—1950)はイギリス植民地時代のインドのMotihariで生まれ，テムズの上流のHenleyで幼児時代を過ごし，Eton校を卒業後，英国インド警察に奉職，1928年に辞任した。その間ビルマで勤務した時の体験が*Burmese Days*(1934)の人物の一部や舞台となって現われる。'Why I Write' の中で，このビルマでの仕事が帝国主義についていくらかを彼に分からせていたと述べているように，この作品には英国のインド支配に対する激しい憎悪と絶望が表わされている。Floryのピストル自殺は英国の圧政に巻きこまれておうのうする作者の良心の経験を象徴するかのようである。この悲劇は自己の抗議の対象が克服されなかった時に，抗議の主体に降りかかる悲劇である。Floryは植民地政策の非人道的な触手に自分も加担しているという自覚につきまとわれる。この精神的苦痛がFloryの被害者意識となって働くのである。人物は作者の経験を媒介する創造物であるから，作者の自伝的要素を被創造物に求めることには無理がある。物語の意味的部分を論ずる本論はその種の媒体をとおして，価値観の混乱する1930年代前半の時代に臨むオーウェルの態度を中心に物語の構造を明らかにしようとするものである。Floryはビルマ人の無知と衝動的行為に反感を懐いたけれども，彼は被害者であるという点でビルマ人と同じ次元に立つことができた。植民地の官吏でありながら原住民という被支配者の立場に立って考えたり感じたりできるという複雑な受容性は*Burmese Days*よりも一年早く発表された*Down*

and Out in Paris and London(1933)に異なった形式で克明に画き出されるのである。*Burmese Days*は,"And in fact my first complete novel, *Burmese Days*, which I wrote when I was thirty but projected much earlier, is rather that kind of book."[1]と作者自身が言うように,彼が30歳の時にすでに書きあげられていたが, *Down and Out in Paris and London*がロンドンから出版されたのも作者が30歳の時であった。前者の出版が一年遅れてしかもニューヨークから出版されなければならなかったのには, 作者も言及しているように,「帝国主義」[2] に対する彼の憎悪と抗議を取扱った作品を英本国で出版することはむずかしいという配慮に基くものであった。

オーウェルは休暇で帰国中にさきのインド警察の職を辞して, 1928年, 一介の市井人となる。帝国主義と共産主義とファッシズムと,不況が複雑に絡みあい,相克する困難な時代において,教師をしたり店員になったりしながら文筆で身を立てようという決心は容易なものではなかった。遂に彼は自分が属している中産階級の親類, 縁者, Eton校の同窓と袂を別かって, 事実上そこから脱出した。安下宿を根拠地にしてロンドンのEast Endを探訪し, 英語の教師を志望してパリに渡り, そこで労働者の群に参加したりするようになった。Wall Streetに端を発した1929年の金融恐慌と市場の崩壊が多数の浮浪者と失業者を生みだしたのも当時のことであった。*The Collected Essays* 1920−1940の 'The Spike'(1931)と'Hop-Picking'(1931)とにはTrafalgarにたむろする200人もの浮浪者の群が記録され, 農場から農場へ職を求めて移動する失業者の群が画かれる。*Down and Out in Paris and London*の僅かなはした金で娘を売るというユダヤ人の放浪者の話などから察せられるように, 経済不況が労働者に強要した犠牲には測り知れないものがあった。旧秩序の崩壊寸前の危機的状況に身をおいた作者もまた不況の犠牲者の一人でもあったわけである。

この作品は日記とも小説とも言われてきたが,これについて一考しておきたい。かりにこの作品の主人公"I"と, *The Road to Wigan Pier* (1937)

の取材報告者“I”とを比較するとき,

> Day after day Boris and I went up and down Paris, drifting at two miles an hour through the crowds, bored and hungry, and finding nothing. One day, I remember, we crossed the Seine eleven times. We loitered for hours outside service doorways, and When the manager came out we would go up to him ingratiatingly, cap in hand.[3]

即ち,この“I”は職を求めてパリの群衆の中を一時間に2マイルの割で歩きまわり,それでも就職口がなくて空腹をこらえて疲労こんぱいする人物である。その感情の表出には演出的効果もあって,悲喜こもごも共感をそそられる。これに対して後者の作品の“I”は報告者であり観察者である。

> I first became aware of the unemployment problem in 1928. At that time I had just come back from Burma, where unemployment was only a word, and I had gone to Burma when I was still a boy and the post-war boom was not quite over. When I first saw unemployed men at close quarters, the thing that horrified and amazed me was to find that many of them were ashamed of being unemployed. I was very ignorant, but not so ignorant as to to imagine that when the loss of foreign markets pushes two million men out of work, those two million are any more to blame than the people who draw blanks in the Calcutta Sweep.[4]

ここには,見られるようにオーウェルの経歴の紹介があり,見たままを報告するジャーナリスト特有の文体がある。だがこの作品も作者の*The Road to Wigan Pier Diary*(1937)と比較すれば,それがいくつかの点で日記,取材メモなどと異なっていることが容易に理解される。一つの報告事項に関して日記には人物や団体名が記してあっても創造的作品には作者は意図的に非個性的

描写に努めている場合が認められる。だからあれほど決定的に記録といわれている *The Road to Wigan Pier* でさえ物語りとしての条件を具えているのである。従ってfictionにもnonfictionにも，ともに芸術的創造の要素と機能とが備わっているのでこの区分は文学作品の区分としてはあまり適切なものではないと言わなければならない。

オーウェルは‘Why I Write’の中で*Homage to Catalonia*(1938) に言及して「はっきりと政治的著作だが……。私はこの本の中で私の文学的諸本能を無視することなく真相の全てを語るために一生懸命努力した。」と述べたあと次のように言葉を結んでいる。

> I happened to know, what very few people in England had been allowed to know, that innocent men were being falsely accused. If I had not been angry about that I should never have written the book.[5]

無実の人間が判断を無作為的に誤まったために告発されるときに感じる「怒り」は彼の言う文学的諸本能の一つである。さらにつけ加えて言うならば，文学的素質，才能の中でもっとも根源的なものとして，美と醜，善と悪だけではなく，真実と虚偽，正当と不当，原因と結果についての識別能力や表現力をも考慮されなければならない。有罪か無罪か，法律に照らして公平な判断が下されるような専問的な知識ではなくて，本能的で初原的な資質としての洞察力があってはじめて複雑なくもの巣の絡みあった中から「真正の価値」は引き出され得るであろう。オーウェルの著作を文学的とするものはこの天性の資質にほかならない。勿論それだけではない。彼に行動を起こさせるものに旺盛なる探求心がある。それがあればこそ本論が考察するように，彼は当時維持されていた秩序から虚偽と真実，不当と正当をより分けることができたのである。*Homage to Catalonia* はこうした彼の資質と探求心にあふれた人間的な行動の結晶である。

2

*Down and Out in Paris and London*は大部分，非個性的な方法で作者オーウェルの経験を語る物語である。主人公“I”は身に金らしいものをまとわず，失業の世界に飛びこみ，木賃宿に住み，職にあぶれ，皿洗いをし，詐欺にかかり，二片のパンで露命をつなぎ，浮浪者の群に投じ，収容所を転々とわたり歩くのである。そこに描かれるものはどん底の人たちの経験の総和とこれらの人々と対立しながらしかもこれらの人々がいなければ存在し得ない多くの人間が描かれる。皿洗いや飯炊き女がいなければ料理人は仕事はできないし，使い走りがいないとホテルの仕事は停滞するし，といった類である。さらに，質屋は貧乏人がいるから商売がなりたち，レストランがあるから客は外食を楽むことができるのである。浮浪者が大勢いるから浮浪者収容所の管理人は月給を貰っているのであり，浮浪者を悪人呼ばわりすることによって，自分は善人であることを主張する人間がいるのである。こうして異状なまでに傷めつけられた上，重労働と栄養失調のために精神的機能が停止ししてしまった人間の行為と存在が描かれる。パリの部で，“I”はホテルの調理場での皿洗の仕事にありつく。この世界では支配人や，顧客はいうに及ばず，コックや給仕までが中産階級の意識を持ち，料理人は職人気取りの熟練工で，彼の頭脳もまた中産階級的である。雑役夫，皿洗い，飯炊きなどはどん底社会の構成員である。彼らの中には一日17時間の強制労働に耐えきれなくなって病死する者や，家族を養いきれなくて難渋している者などが登場する。後半のロンドンの部では，群をなす浮浪者の動きが描写の中心となる。彼らの中には低能なものもいるが，皆，善人であって，友愛的で心の明るい人間である。彼らの存在は収容所と収容所の間を行き交う浮草のようである。万一彼らの悲惨な状況を忘れるならば彼らは足を鎖でつながれていない自由の民となる。

だがこの作品に描かれているように彼らが追い込まれた状況はもはや破局

的なものであって，彼らの生存能力は喪失の極限にまで達したのである。オーウェルは彼らのこうした生活の荒廃の責任を中産階級の虚偽の意識に帰していることは注目すべきこととである。従って彼は貧困を作り出す財産と所有を排斥すると共に労働者を差別する中産階級の没道徳性を時に諷刺し，時に痛罵する。彼は熟練工と不熟練労働者の関係の中にも同質の敵対行為を見出して驚いている。どん底の人びとを差別視する人びとの偏見はますます労働者を苦境に陥れるところとなる。さらに不況による失業者の数の増大は彼らを一層深刻な受動的無気力状態に追いこむ結果となる。浮浪者のBozoは次のように述懐する。

> He was an embittered atheist (the sort of atheist who does not so much disbelieve in God as personally dislike Him), and took a sort of pleasure in thinking that human affairs would never improve. Sometimes, he said, when sleeping on the Embankment, it had consoled him to look up at Mars or Jupiter and think that there were probably Embankment sleepers there.[6]

Bozoの声は労働者階級のおかれた絶望的状態を代弁する集団の声である。今や神は下層の人びとの心の中から姿を消してしまった。神を見失った人間にとって今夜もBozoと同じようにテムズの河岸ベンチで野宿している仲間が大ぜいいるということが唯一の慰めとなる。神がいる間は神は彼らの自負となり，知性となるのであるが，今やそれらが消え失せてしまったことを彼は嘆く。Bozoは中産階級出身の教養のある人物で，今は浮浪者仲間の一人である。彼にはオーウェルの人間観察の一つの視点が与えられていることになる。

3

"Down and Out"とは欲望を充足させる貨幣を持たない人間の世界を指す

言葉である。人びとは労働と睡眠のリズムの上で生命をつないでいるだけで彼らの行動には自律性がない。中産階級はこれらの「浮草の民」を最低所得のために軽蔑し，宿なしであるが故に彼らを悪人扱いする。他方，その扱いを受ける人間には自己を疎外する貨幣を能動的に否定するバイタリティーがない。「空腹は人間を無気力にしてしまった」，[7] と言うオーウェルは飢餓的状況の中で金銭という外的能力によって破壊された人間性のありかを探すのである。人間性はともかくその前にバイタリティーの回復を計らなければならない。作者の探求の眼はここに働く。前章で触れた視点はBozoという浮浪者が具備している視点で労働者が現象や事件について考えているところを見い出す視点である。換言すれば“I”には外側の経験を見る作者の視点が与えられており，Bozoには内側の経験を見る作者の視点が与えられている。やがてわれわれにはこの物語は，進むにつれて外側の経験から内側の経験へ入っていくことが分かるのである。

どん底の人たちは失業と病気の恐怖におののきながら最悪の条件で働いている。そこでの仕事とは一体何を意味するものなのか。

> The question is, why does this slavery continue? People have a way of taking it for granted that all work is done for a sound purpose. They see somebody else doing a disagreeable job, and think that they have solved things by saying that the job is necessary. Coal-mining, for example, is hard work, but it is necessary- we must have coal. Working in the sewers is unpleasant, but somebody must work in the sewers. And similarly with a *plongeur's* work. Some people must feed in restaurants, and so other people must swab dishes for eighty hours a week. It is the work of civilization, therefore unquestionable. This point is worth considering.[8]

労働は日常使用される必要品を生産するという尊い使命を持っている。しかるに現実には就労することは奴隷状態に入ることである。レストランの皿洗いは一週間80時間労働を強られる。インドの人力車の車夫は数哩走って疲労のあまり速度が落ちると乗客からステッキで頭をなぐられるという。このような労働はもはや必要のためにあるのではない。それは偽りの文明のなせる仕業なのである。文明は人間全体を向上させるためにあるのではない。一部の人間が快適な生活を送ろうとするために，他のすべての人間は大きな犠牲を払わなければならない。では事実レストランで食事を摂る客は支払う金額に相当する内容の料理を享受しているのかと言えば答は否である。それでもレストランに来るのは客が虚栄を満足させるためである。人力車を利用する客の大半は体面を繕い，優越感を満足させるためにそうするのであるという。偽りの文明は労働者を棄損し，中産階級を偏見の奴隷にする。オーウェルはこのように「商業文明」Commercial civilizationの真実のいとなみを見る。彼のこの視点は彼がどん底生活に入る前から帝国主義についていだいていた問題点を直視する視点と同じものである。[9] オーウェルによれば労働と生産は一方において有用性のための本質的生産でありながら他方において文明のために行なわれるということになる。この場合，文明とは蓄積された利潤の総和のことである。余剰価値は人間の共同的存在を止揚してしまいそれの代りに人間を1週間80時間労働にしばりつけるような社会を作り出してしまった。その結果オーウェルのような下層中産階級までが何らかの被害者となる。大衆は強制労働か，失業と浮浪かの選択を迫まられる。1930年代前半期のオーウェルは文明のもつ不平等の構造を洞察していたと言うことができる。このような不平等を作り出す経済の構造を見る態度こそ作者のすぐれた芸術的創造を可能とするものでなければならない。オーウェルはこの世界で奪ったり奪いかえしたりする人間の抗争的な営みを見るのではなく，彼が見たものは失業に苦しみ自由を渇望するけれどもそれを行動に表わす力のない人間である。ロンドンの街の浮浪者の一人 Paddy は一きれの食パンを道連れの

友にわけ与える愛情の持主であるけれども，食べものがなくなるとただすすり泣くだけで空腹をこらえるのである。彼らには外部からの救済の手が差しのべられなければならない。失業者が朝早くから行列を作って，採用の順番を待つ情景がある。失業者があまりにも多数であるという理由で，“The number of unemployment men who are ready to do the work makes them powerless to fight for better treatment.”[10]，と作者が言うように，彼らは自力で更生することはできない状態に追いこまれている。Raymond Williamsはオーウェルは労働者の「受動性」をここに見ることができると指摘する。[11] 受動性とは多数の労働者の無気力に見られる *animus* である。それは一種の集団心理である。オーウェルはこの社会的真実によって前進を阻まれて遂には後退を余儀なくさせられる。作者の敗退の経験は，*A Clergyman's Daughter*(1935)，のDorothy の反逆者としての経験にも見られ，不平等との袂別の決心をしながらかえって金銭が支配する社会にひきずり込まれる *Keep the Aspidistra Flying*(1936) の主人公Gordonに見られる経験である。オーウェルが観察した人間の受動性は知性の欠如と感情の疎外から生ずる一つの歴史的特性である。これが発生論的考察は第6章に譲ることとする。

Burmese Days では現地人の子供に傷害を与えてその子供を一生の不具者にしてしまったイギリス商人の暴行傷害行為はビルマ警察からは正当防衛として認められ，彼は不起訴になる。ビルマ人たちは憤って抗議に押しかけるところを暴動とみなされ発砲を受けて鎮圧される。この事件で，英国弁務官に象徴される帝国主義という権威によりすがって生きる人間とは異なり，人間性を自覚した知性的存在であるFloryは自己の良心の命令と権威の重圧に耐えかねてピストル自殺を遂げる。警察の機能がかえって無秩序社会を創り出すということを訴えるだけでなくオーウェルはここに人間性の危機を見るのである。

'Flory? Oh yes, he was a dark chap, with a birthmark. He shot himself in Kyauktada in 1926. Over a girl, people said. Bloody fool.' Probably no one, except Elizabeth, was much surprised at what had happened. There is a rather large number of suicides among the Europeans in Burma, and they occasion very little surprise.[12]

Flory の自殺の意味は人びとには分からない。権威によりすがることによって地位と財産に対する欲望を満足させることができるという生活の意識には知性と正義感は見られないのである。彼の自殺は権威とそれに依存する生活を否定するための行為であるが，知性と正義感を失なってしまった世間にはFlory のこの自殺の真意が分からないのである。

文明のみならず帝国主義や貨幣が人間性から離れて独り歩きをしている社会ではそれらは知性と感情のような個人的生得的諸力がなし得ないことをなす能力を得る。*Down and Out in Paris and London* の"I"は金銭を持たないで貨幣経済が支配する文明社会にはいっていったが人間と社会のために彼がなし得るものは何もなかった。Floryは自殺することによってしか人間の倫理と感情をまっ殺する文明を否定することはできなかった。"I"とても貨幣以外に生きる方法を知らない中産階級の意識を否定することによって，疎外された感情をわずかに自己の中にのみ回復するにすぎない。Floryの死は絶望の象徴であったが，それに反して"I"の階級意識の否定は絶望の状況に見られる感情の疎外を克服しようとする試みにほかならない。調理場での長時間労働に耐えている数人の人間は文明が疎外したはずの感情の世界に生きている人間である。彼らは体面と虚栄と物欲と欺瞞から解放された世界に住み友愛と信頼を分有するけれども，協力と連帯によって支えられた世界に住んでいるのではない。中産階級は文明の意識という重い鎖を引きずって歩かなければならない。だが底辺で働く人びとには足かせははめられていない。彼らに

は積極的に行動する能力はないが，中産階級にはないところの感情の自由がある。かくしてオーウェルは自己の中産階級の意識を否定して労働者仲間の一人となることによって二つの意義深い経験をした。即ち一つは彼らは自発的に環境を変革する力から疎外されてしまっているということ，いま一つは欠乏の日常生活にも拘らず，中産階級には失なわれてしまった人間性の息吹きをその中に見ることができたということである。*Down and Out in Paris and London*は*Burmese Days*よりも一年早く出版されているけれども，*Burmese Days*には，抑圧された感情の解放がFloryの死によって恰も予言されているかのようであり，*Down and Out in Paris and London*にはよし浮浪者という歪めまれた形体をとるにせよ，感情の世界即ち自由の構造が実在しているのを知ることができる。根のない浮草は現代の社会で許容されるぎりぎりのところで，とりもどされた人類の自由を象徴するものであろう。

Floryのボルシェヴィーク思想[13]と彼のビルマ人の習慣の尊重などは彼と同じ階級の人たちに彼を敬遠させる。「土人は土人である。被支配民族である。黒い顔をした劣等民族なのだ」，[14] このような露骨な偏見に支配される社会の構成員でありながら，事件が発生すると被支配者の味方になる。この矛盾は彼が差別意識が支配する階級と袂別する以外に解消することのできない対立関係である。被害者として恨みの念に身を焦がして抗議に立ち上がる。だがビルマ人を前にしながら最後まで加害者であるところの支配階級とたもとを分かつことはできなかった。矛盾どう着から自己を解放するには自殺以外に方法はなかったのであろう。これに反し，“I”が無一文の裸一貫でパリのどん底に飛びこんで，友人の援助を拒むためにはなみなみならぬ勇気を必要としたであろう。この勇気はまた*Homage to Catalonia*の銃を取ってファッシズムと戦った主人公の勇気でもある。勇気は人間的存在に与えられた能力である。

4

パリの下層労働者の苦悩の原因とビルマ人のそれとは彼らが共に犠牲者で

あるという点で同質のものである。

> No doubt hotels and restaurants must exist, but there is no need that they should enslave hundreds of people. What makes the work in them is not the essentials; it is the shams that are supposed to represent luxury. Smartness, as it is called, means, in effect, merely that the staff work more and the customers pay more; no one benefits except the proprietor, who will presently buy himself a striped villa at Deauville.[15]

これによって見るように，生存の限界を彷徨する大衆は贅沢と世間体を繕う行為，利益を上げる経営者の犠牲となる。顧客が支払う料金は決して提供される食事に相応しい実質的なものに対して支払われるものではないのである。金銭が飢えた人に食事を提供するために使用されることを疑わない読者は，飢えた人に普通の食事を摂らせないためにそれが費やされている話を聞かされて驚くであろう。オーウェルが創造した世界では金銭は暴力を揮って人間を金銭が働く場から追い出してしまうのである。こうして受動性は文明の発展の段階を示すところの歴史的概念となる。それは生命を破壊する力の及ぶ範囲から脱出することによって，かかる否定的な力に耐えていこうとする大衆の新しい抵抗である。

上に見る二つの視点は互いに他を揚棄することのない二律背反の視点である。このことが後に見るようにオーウェルの文学の独自性を生み出すのである。自然界ではあい異なる力が両極に働くことによってバランスを保っているけれども，人間の社会は自然界ではないのである。「あるホテル」の主任が“I”にひげをそるように命じ，そらなければくびにすると言いわたす。この職場主任は慣性的な物の見方しかできない。“I”は知性を抑制してこの命令に従う。権威と服従との関係には知性が介在することはない。その関係はただ慣習によって支えられているにすぎない。またホテルの支配人は出入りの

商人からわいろを受取り，それを当然のボーナスだと思いこんでいる。人間が感情から疎外されると堕落した功利主義の道を選び，そこでは正と不正は倒錯しているのである。この道は物欲の奴隷が歩く道である。Thomas Hardyや，D. H. Lawrenceの主人公はこの道を歩くことを拒絶することによって感情の世界を創造した。オーウェルにはこれらの感情の世界の創造性はないが，彼はその代りに現実の非人間的行為をさらに冷静に分析する。価値の倒錯に支配された人間に対するオーウェルの冷笑，諷刺，憎悪，罵倒はその分析の所産としてオーウェルの文学に固有のものである。Lionel Trillingはここに作者の高潔な人柄を認めているのである。

> Orwell, by reason of the quality that permits us to say of him that he was a virtuous man, is a figure in our lives. He is not a genius, and this is one of the remarkable things about him. His not being a genius is an element of the quality that makes him what I am calling him a figure.[16]

オーウェルの時代は経済活動に内在する矛盾が招いたおそるべき混乱の時代であったことは今日の時代と質的に変わらない。彼は何とかしてこの異常を正常に戻す道はないものかと自己を投げうって模索をはじめたにちがいないと思われる。それ故彼の創作活動は今日の経済構造と相同関係にある。

彼はそこに二つのものを観察した。それは労働者の集団としての無力状態と中産階級の倒錯した価値観即ち虚偽の意識の領域の拡大であった。料理人や給仕までが中産階級を気取って労働者を差別する。それは労働者社会の崩壊の速度を更に一層速めるかも知れないことを危惧した彼はこの崩壊をくい止めようとする。

> It is queer that a tribe of men, tens of thousands in number, should be marching up and down England like so many Wandering

Jews. But though the case obviously wants considering, one cannot even start to consider it until one has got rid of certain prejudices. These prejudices are rooted in the idea that every tramp, *ipso facto*, is a blackguard.[17]

労働者の棄損された人間性を回復する力が労働者自身にないことを観察した作者は次に見るように道徳的な危機の克服の仕方に情熱を傾注するのである。それには何よりもまず，中産階級特有の偏見から人間を解放することであると作者は言うのである。彼は中産階級に向かって物欲と偏見で凝りかたまった虚偽の意識からの解放を説得する。それと同時に土着性を失なって放浪する労働者を救済しなければならないと考える。この階級的自由への切なる憧憬と中産階級による労働者の救済の思想はオーウェル文学の真髄であろう。大道絵師の浮浪人Bozoは自由を渇望するオーウェルの媒体である。"He spoke French passably, and had read some of Zola's novels, all Shakespeare's plays, *Gulliver's Travels*, and a number of essays."[18] これによって分かるようにBozo は中産階級出身の教養を身につけた浮浪者である。彼もまた階級とたもとを別かった一人の人間として心の温い，正直者の集まりである浮浪者の仲間入りをできたことを喜ぶ。そうしてこの仲間の世界には人間性が息づいていることを知るのである。しかしながらBozoが体現した自由は，彼の老衰と行き倒れが象徴するように，未来のない束の間の自由でしかなかった。短い間ではあったけれども浮浪者と仲間になることができたという感激の復活だけを経験して彼は世を去っていく。

作者は自由と平等を求めてやまなかった。平等はどこにあるのか。その実現はどのようにして可能なのであるか。私有財産の止揚を模索しながら彼は乞食と中産階級の差は所得の格差にあることや，失業と低賃銀が労働者を無力化してしまったことを認めた。そればかりではない。浮浪者は根無し草の故に罪人視されている。彼らは経済学的には交換価値の犠牲者である以上，交換価値を否定すると共に真の価値の実現をめざして努力を払わない限り，

人間性は打撃をこうむり，危機的様態から脱出することはできないのである。だがオーウェルは脱出する力を労働者自身に認めようとはしなかった。それ故，彼は次のように確かな所得の保障という政治の世界に解答を求めようとする。

> In all the modern talk about energy, efficiency, social service and the rest of it, what meaning is there except 'Get money, get it legally, and get a lot of it'? Money has become the grand test of virtue. By this test beggars fail, and for this they are despised.[19]

作者の提案は人道的な立場から提出される政治的，制度的な救済案となる。中産階級が意識の変革をなし遂げた上でその救済は実現可能となるものである。要するに危機を克服するために努力を払う主体は中産階級であるという主張が明らかにされるところとなった。同時に中産階級を飛びだしたオーウェルが変革を目ざして中産階級へ逆戻りする姿を反映する主張であることも明らかにされたのである。従って彼の未来への道も消えてしまった。確かに200万人という失業者の数は労働者にとって拷問であったにちがいない。[20] 作者はこの彼らの苦悩を救うために，一度否定したところの中産階級の人間性に向かって，どん底の人間の救済は中産階級の義務と責任であることを訴えることによって，作者の袂別と拒絶と放浪は過去の理想化の中に吸収されるところとなり，過去現在未来の相互作用は認められなくなる。

人種的偏見の否定，[21] 人間の財産からの解放，市場生産に支配された虚偽の意識の変革がオーウェルの主張するように実行されたとして，作者も犠牲者の一人であるところの帝国主義は終末を告げるであろうか。彼の提案どおりに平等の政策が制度化されたとしても，また浮浪者を善導する教育的施設が実施されたとしても，経済制度が帝国主義の原理を包摂するものである限り危機意識はますます深まる一方であるのではなかろうか。

5

浮浪者や乞食をなくすためにオーウェルは上に述べたようないくつかの提案をしている。その提案の声はもはや登場人物としての“I”の声ではなく，正しいアクセントで話し，そして浮浪者補導官から紳士として扱われるEric Blair である。[22] その提案の中で「彼らに労働の恩恵を直接受けるような仕事をさせる」，「救貧院に野菜畑を作って，そこで獲れた野菜は彼らに食べさせる」，「現行の救貧制度では彼らの生命を失わせるばかりでなく財政の浪費でもある」，[23] などと作者は語る。明らかにこれは政治機構に関係する内容をもつものであるが，その内容は緩衝器の役割しか機能しないものであろう。だが新しい制度を設けるための政治的，法律的性質を持ち，かつ「乞食をなくする」depauperize ことができるかどうかは別として，乞食的心性をなくする道徳的な提案としては示唆に富むものである。オーウェルはDickensが建設的提案をしない，彼は法律的，政治的，教育的諸制度を攻撃するだけで，具体的提案を決して示さない，と言うのである。[24] 彼はこれをDickensの小説の世界の特長の一つとして取り上げたまでのことである。たとえばDickensの*Dombey and Son*の構造が人間の変革という歴史的構造に対応するものであるのに対し，*Down and Out in Paris and London*のオーウェルを媒介する“I”やBozo はその経験が生みだした諸提案を残して自らは歴史の舞台から姿を消していくのである。Floryも，Gordonも，Dorothyも，1930年代の小説のオーウェルの経験を媒介する人物はみな同じように敗退する。その敗退の姿には自己の無力さは運命のような，自分の力ではどうにもならないものに起因するという諦めがある。そしてそのような無力と敗北の故にオーウェルは人間性には誰よりも強い期待を寄せたのであり，彼の勇気ある経験と未来を見失った敗北が“I”やBozoやFloryという形式を創造したという意味で，彼の芸術的業績は高く評価されなければならない。

どん底の階層を見る視点と中産階級を見る視点によって作者の経済に対す

る態度が明らかにされた。とくにこの二つの視点は小説の構造を構成する重要な要素である。彼はビルマにおける民族社会の崩壊を見，本国における労働者の土着性の喪失と地域社会の衰滅とを見たのである。それらの旧秩序の崩壊を克服するために作者は知性的な提案を示唆した。その一つは中産階級の無関心と空虚な価値観からの解放であり，いま一つは所得格差の縮少，即ち平等の原則の法制化であった。作者の提案即ちオーウェルの直接の声による危機意識に対応する彼の干渉は人間と人間とを組織する力の源泉にはふれないで，単なる法制上の改善にとどまるのではないであろうか。その提案は現在の社会構造をそのままにしておいて人間をいかにしてその構造に適合させるかという問題を超えるものではないのである。その意味では彼の提案には人間の変革にふれるものがない。だがオーウェルのこれらの初期の作品のすぐれた構造を支えているものは現代の人間は有用性の価値観をすててしまって利潤性を規準にした行為を肯定していることを作者が芸術の分野で形式化したことであろう。これは Lucien Goldmann の言う交換の構造に対応する小説の構造を意味するものである。

Goldmann は次のように述べている。

> 小説が提示するいかにも複雑をきわめた形式は，量の媒介により，交換価値の媒介によって棄損された様態において……(中略)……あらゆる使用価値をもとめなければならないという状況におかれながら人々が毎日生きているその形式にほかならないのである。[25]

経済構造が激変する中で人間性は大きな打撃を受ける。そのような危機的様態において，オーウェルが使用価値を回復させることによって中産階級がその虚偽の意識を脱ぎすてることができることを主張したことは無視されてはならない。それは作者のすぐれた創造的主張として，作者が中産階級の偏見から脱出して本気になってどん底生活を実行した経験から生み出されたもので

ある。道徳の世界への回帰を説き浮浪者に労働の真価を体験させるために収容所の野菜畑で収穫したものを食べさせる制度を設けることを提案したオーウェルは未来の真の自由の王国の建設の原理となるものを発見し，それを次の世代に語りつたえているのである。われわれが高く評価するのは貴重な人間的真実の発見とそれを伝達するオーウェルの創造的な芸術は過去においてかって存在していたものの発生を未来において促がす次元の一形式であるという点である。

6

本稿を結ぶにあたり，受動性についての歴史的考察に触れておきたい。I. A. Richardsが"the arts are the Supreme form of the communicative activity,"[26]と述べているように，作品が伝達する技法的なものと精神的なものとのうち，本論は後者の伝達の形式を中心に，1930年代の前半のオーウェルの作品を取扱ってきた。"I"，Bozo, Flory などの主人公は作者の心理的活動としての経験を伝えるために創造された一形式である。これらの形式を再構成することによって，二つの視点と作者の態度に論及することができた。伝達される精神内容とは作者に固有の経験であり，その経験がになう歴史的意義性もしくは価値である。小説の構造が経済の構造に対応するものであることが再構成の手続きを経て見出された時にはじめてその作品の伝達内容の歴史的意義性が評価され決定される。したがって本論が解釈した受動性という大衆の精神現象は経済の歴史的構造の一部であることが判明した。Georg Lukácsは『歴史と階級意識』の中で，マルクスの「疎外」の文学的特質を表現する用語として「物象化」または「物化」reification という新しい造語を示した。疎外といい，物化といい，これらは経済の構造が人間の精神に影響を与えたところの歴史的意義を負荷する言葉である。しかし言葉からは何らの有意義な経験が生れてくるわけではないから，構造研究にとって重要なのはそのような言葉を必要とした人間的，歴史的経験である。オーウェルは以上で扱った

作品の中で，自己の属する階級の人びとの精神の中に物象化の現象を見るのである。彼の峻厳な道徳的態度から見るならば，そのような現象は腐敗堕落の現象で，いかにしても人間はその足かせから解放されなければならないものであった。だが経済の構造が変革されない限り，人間の解放はあり得ないことを読者は容認するのである。伝達されるものはここでも否定的なものである。人間は解放されるどころか，ますます多くの人間が技術主義に支配され管理されるようになる。ホテルの管理人は勿論，コック，給仕人にいたるまで自分は中産階級だと思っている。オーウェルの世界では圧倒的多数を占めるものは労働者ではなくて中産階級であることがオーウェルの一つの視点を通じて伝達される。換言すれば，それは未来の歴史の進化に大きな影響を及ぼすと思われる中産階級の経験の伝達である。

オーウェルのもう一つの視点は右の中産階級の経験にも劣らず，歴史を大きく変えてしまうのではないかと思われるほどの新しい経験を観察するところとなる。それは多数の失業者を仲間から出しながら恐怖におののきつつ生存の限界を彷徨する労働者の姿と彼らの意識に定着した「受動性」(passivity)である。オーウェルのこれら初期の作品の重要さを指摘する Raymond Williams が早くからこの労働者あるいは大衆の歴史的精神現象について言及していることは既に触れたところであるが，オーウェルの作品の構造は大衆の受動性が言外に伝える人間的，社会的危機の構造に照応するものであるということができる。受動性が持つ意味は倫理観やイデオロギーの介入によって付与されるような静的なものではない。その経験は貨幣を否定することによって可能となった屈辱のどん底生活が聴取した歴史の足音を伝達するものである。毎日の窮乏の生活に耐えさせるものは明日への希望である。希望は人間に提供された贈物であり，それによって人間は実現化と何らかのかかわりあいを持つ。自由の獲得が感情の世界の復活を意味する現代の人びとには復活の運動に参加する活力がない状態がこれらの物語りの中で再構成されることができるのである。作者が浮浪者の救済についていくつかの提案をして既存の

秩序と体制を動かそうとするのはオーウェルが階級意識を否定できなかったからだというのは一面的な解釈でしかない。むしろ彼のその種の提案は歴史的危機の様相を呈した段階における大衆の無能力状態を如実に傳達したものと理解すべきである。

Rosa Luxemburg は1912年に既に大衆の受動性に触れてこう述べている。

> だが，そのうちに体力がおとろえてくる。長い失業，事故，近づく老齢—ひとり，またひとりと，手あたり次第の仕事に手をのばさなければならなくなり，馴れ親しんだ職業をはなれて，たえず転落していくのである。まもなく，このプロレタリアの生活は，まったく偶然の手にゆだねられる。かれは，不幸に追いまわされ，物価騰貴に苦しめられる。パンを手に入れるために，たえずはりつめてきたエネルギーも，ついにはゆるみ，自尊心も失なわれてしまう。こうしてかれは，浮浪者のための収容施設の入口に立ち，あるいは，事情によっては，刑務所の入口に姿をあらわすことになるのである。[27]

Luxemburgのこの記録は経済の構造の人間的な要因の理解に役立つとともに，オーウェルの創造的形式に対する読者の歴史的な把握を導くものである。受動性はオーウェルがこの引用文に見られる歴史的でき事を通じて直観した存在の本質を捉えた用語と考えてもよいであろう。そしてこの解釈は発生論的構造主義の研究の成果の一つでもある。これらの初期の作品を読むことによってオーウェルがデマゴーグであるとする一部の偏狭な解釈は許されなくなる。また Stalinism に対するオーウェルの理解を的確に位置づけようとする場合に，以上の構造主義的解釈は有力な鍵となるであろう。マルクスは『経済学・哲学的草稿』の中で貨幣を人類の外化された能力として規定した。したがって貨幣を持たないということは人間を疎外する力から脱出することによって自由を得るということと同じである。それ故，オーウェルの金銭の否定は自由を経験するための一つの手段である。だがそれはあくまで試みられた手段である

ことはロンドンの浮浪者収容所の入口に立った時点ですでに判明していることである。社会的現実において，人類から疎外された能力としての貨幣の否定の実践は革命がおこらない限り，いかなる個人によってもなし得られるものではない。

継続的な人間の労働行為は富の蓄積の増大を伴う。Lucien Goldmannによれば受動性はこのような労働者の行為の結果現われる心理学的現象である。

> With the particular terms and conditions of the development of wealth in Western societies, the risk arises of dividing society into two groups, one of which —the strongest numerically — would be fundamentally condemned to passivity, and the other—the technocracy — would monopolize all decision-making.[28]

受動性は富の蓄積が特定の段階に達した時に大衆が自らの意識の中に認めざるを得なくなるような存在的特質である。それは宇宙の意志に支配されるという宿命を帯びた大衆の特性をいうのではない。即ち特定の地域で一定の条件のもとで行なわれる生産活動がそれ自体が持つ構造を変革することなしに継続的に行なわれる時にその延長として現われる次元の精神である。『旧約』の世界ではエジプトの地で迫害された古代イスラエル人は苦悩の末にエホバとそのしもべ，モーゼの指導を得て救われることになった。彼らは予言に導かれて遂に，地上に天国を築くことに成功した。『共産党宣言』に描かれる労働者は足につながれた鎖以外に何一つ失うもののない状況で苦しんでいる。マルクスの予言によればプロレタリアは共産主義者の指導のもとに世界をとりかえすことができることになるのであった。

オーウェルにとっては受動性によって疎外されたエネルギーを取り戻すためには既成の秩序と体制に訴えるほかなかったのである。これは単純な回帰でもなければ彼の敗北の行為でもない。倫理への回帰と敗北主義だけを考察の対象とする批評は不適切で徒労であると言わなければならない。二つの視

点を決定した作者の創造的な態度と，それによって観察と思考を可能にしたところの現実の複雑さを伝達するという芸術本来の機能に対する作者の貢献は偉大なものである。そうして，彼の身辺に発生し，進化しつつある意義深い歴史の解釈を読者に委ねた先見的直観力はとりわけ高く評価されるべきであろう。

注

1 George Orwell, *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Vol.* I (1920—1940), (London: Penguin edition, 1970), p. 25.

2 *ibid.* p. 26.

3 George Orwell, *Down and Out in Paris and London* (London: reprinted in Penguin Books, 1975), p. 29.

4 George Orwell, *The Road to Wigan Pier* (London : reprinted in Penguin Books, 1975), p. 76.

5 George Orwell, *Collected Essays*, p. 29.

6 George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, p. 149.

7 *ibid.* p. 34.

8 *ibid.* p. 104.

9 George Orwell, *Collected Essays*, p. 26.

10 George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, p. 159.

11 Raymond Williams, *George Orwell* (New York: The Viking Press, 1971), p. 45.

12 *Burmese Days* (London: reprinted in Penguin Books, 1969), p. 268.

13 *ibid.* p. 181.

14 *ibid.* p. 112.

15 George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, pp. 105.-106.

16 Lionel Trilling, 'George Orwell and the Politics of Truth,' *in George Orwell*, edited by Raymond Williams (New Jersey: Prentice Hall, 1974), p. 65.

17 George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, p. 178.

18 *ibid.* p. 148.

19 *ibid.* pp. 154.-155.

20 *ibid.* p. 160.

21 *ibid.* p. 150.

22 George Orwell, *Collected Essays*, p. 58.

23 George Orwell, *Down and Out in Paris and London*, p. 183.

24 George Orwell, *Collected Essays*, p. 457.

25 Lucien Goldmann, 『小説社会学』, 川俣晃自訳（合同出版, 1969), pp. 26.-27. Originally published in French, *Pour une sociologie du roman* (Paris: Editions Gallimard, 1964)

26 I. A. Richards, *Principles of Literary Criticism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), p. 17.

27 『ローザ・ルクセンブルグ選集3』, 高原宏平, 他訳（現代思潮社, 1969), p. 40.

28 Lucien Goldmann, *Lukacs and Heidegger, Towards a New philosophy*, translated by Williams Q. Boelbower (London: Routledge & Kegan Paul, 1977), p. 87.

TWO LITERARY STANDPOINTS OF GEORGE ORWELL IN *DOWN AND OUT IN PARIS AND LONDON*

Junji Miyasaki

It is worth considering some of Eric Arthur Blair's experiences in the critical period from 1929 through the 30's which revealed the flaw of imperialism and the inhumane influence of the great depression. He resigned from his office in the Imperial Police in 1928. While he was earning his living as a teacher, he went to Paris where he lived with poor people in a doss house, and went exploring in the East End of London and lived with tramps in the working districts. *Down and Out in Paris and London*, which is a record of his outside and inside experiences, was the first book by George Orwell published in 1933.

A structural research has led to an intrinsic worth of this book, which consists of two standpoints. One is an objective standpoint which is proper to journals, and from it the writer observes and records what happens to him and his surroundings. The other is a subjective one in which he feels and thinks about what happens as a creative writer. The figure, 'I', who is given the writer's direct voice, has chosen the first one. The second one can be found in Bozo's attitude towards life. Bozo is created by Orwell in order to give an expression to the writer's inner experiences. It is the objective standpoint that enables the writer to recognize passivity in the

consciousness of those laborers who are afraid of unemployment. In the subjective standpoint he denies ownership and property, laying emphasis upon freedom and equality. But, on reflection, I am afraid that the standpoints will contradict one another. The truth witnessed in Exodus shows that it is wandering people that will be able to move forward for the establishment of freedom and equality in the global society.

George Orwell comes up with certain economic measures for a stimulation of employment and some educational schemes for the recovery of humanity in the world of tramps, in those closing chapters. As for this kind of writer's intervention, it is of political propensity rather than of aesthetic quality. He was, however, remarkable in that he became penniless, trying hard to disconnect himself from established society where most people, he was aware, were equipped with a false consciousness. What mattered was his attitude towards life represented as Bozo's in this book.